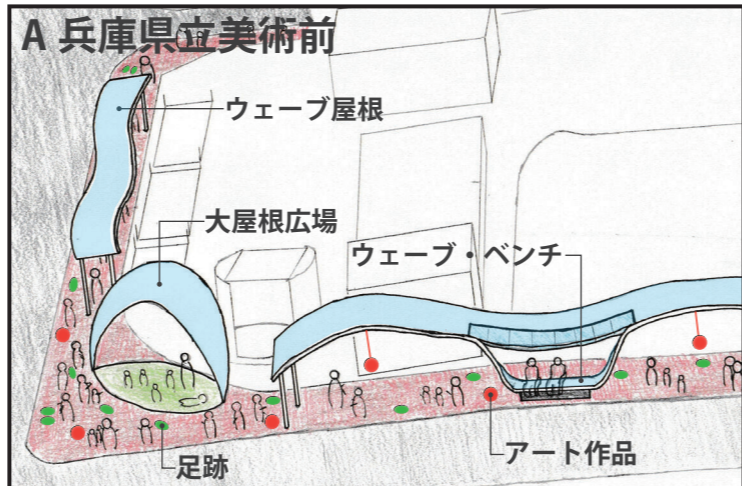
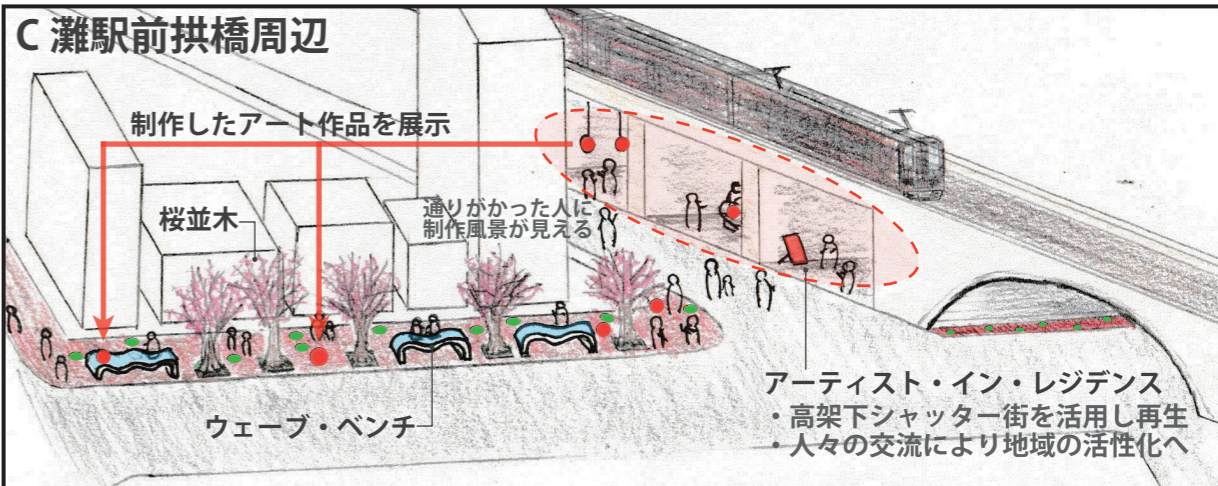


# ひとつながりのキャンパス

兵庫県立美術館から神戸市立王子公園までを結ぶ南北約 1.2km の「ミュージアムロード」。周辺には美術館や動物園などの文化施設やパブリックアートが多く集まり、**芸術・文化を楽しむにはもってこいの環境**である。近年周辺では再整備やリニューアルなどが予定され、**転換期**にある。なかでも王子公園に大学の**新キャンパス**が開学することがまちを大きく変えるであろう。学生が国内外から4000人が集う**国際色豊かなキャンパス**となる。そこで、アート作品を通じて地域住民や国内外の学生など様々な**人々がつながる環境**を設ける。ミュージアムロードを大きな1枚の**つながるキャンパス**に例えて、作品の**創作活動**を通じ、**地域交流や異文化交流による国際的なネットワーク**を構築することで、**地域文化の活性化につながり魅力的なこれからのミュージアムロードをつくらう**ではないか。

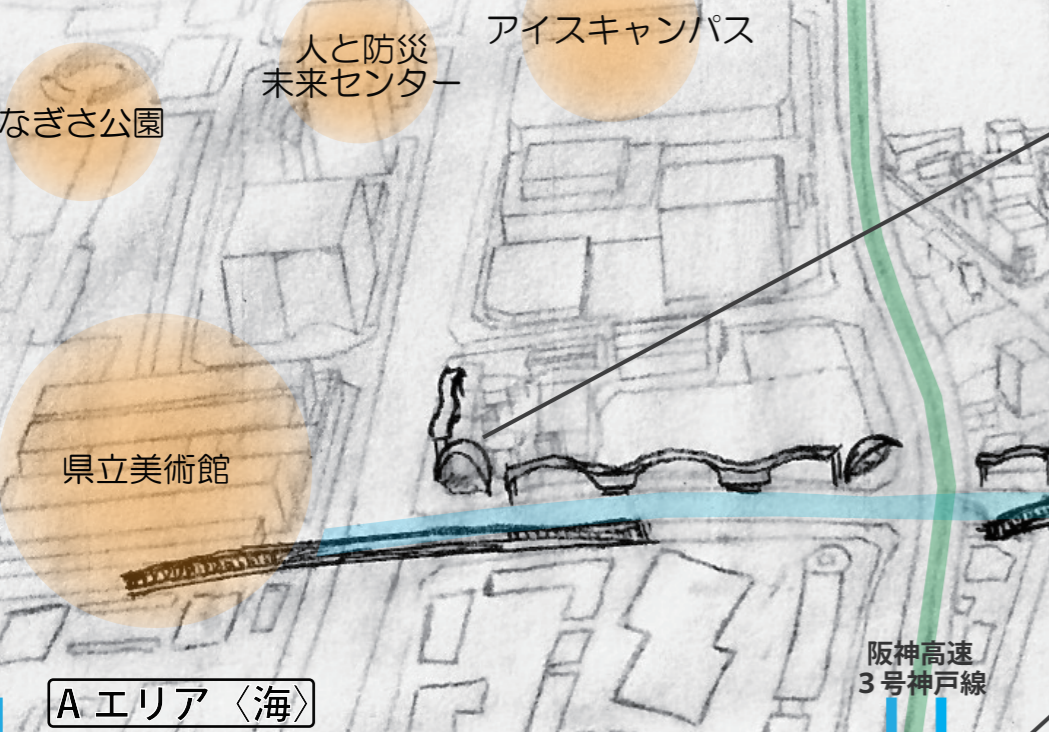


渚中学校前の空き空間に大屋根を整備する。HAT 神戸の各施設による出張イベントを開催することで、通行者に認知と関心を持ってもらう場とするなど、**多様な用途**に使用する。イベントがない時は寝転がることのできるスペースとして開放し、誰でも気軽に利用できる**憩いの場**とする。

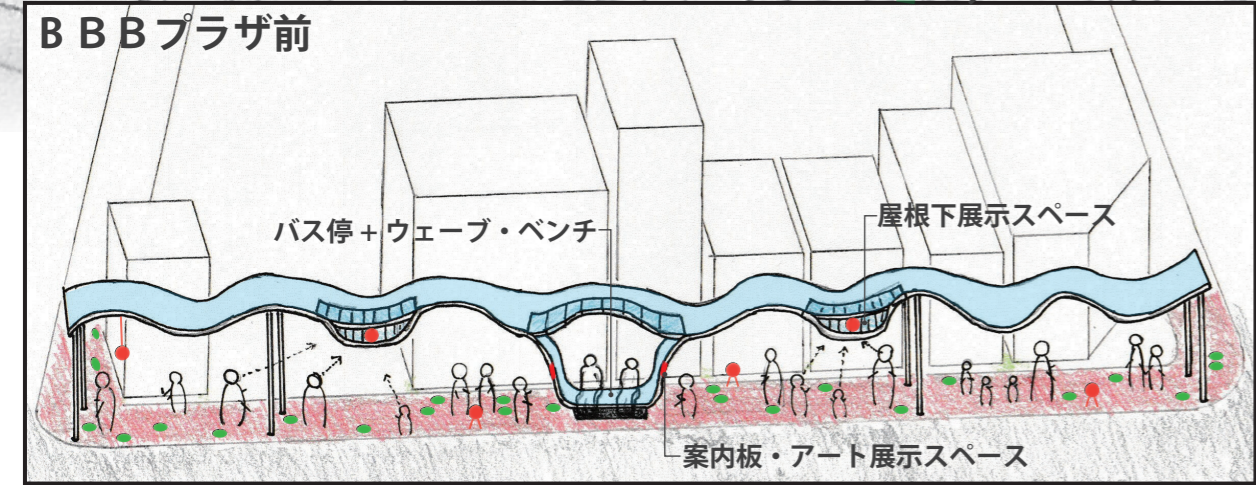
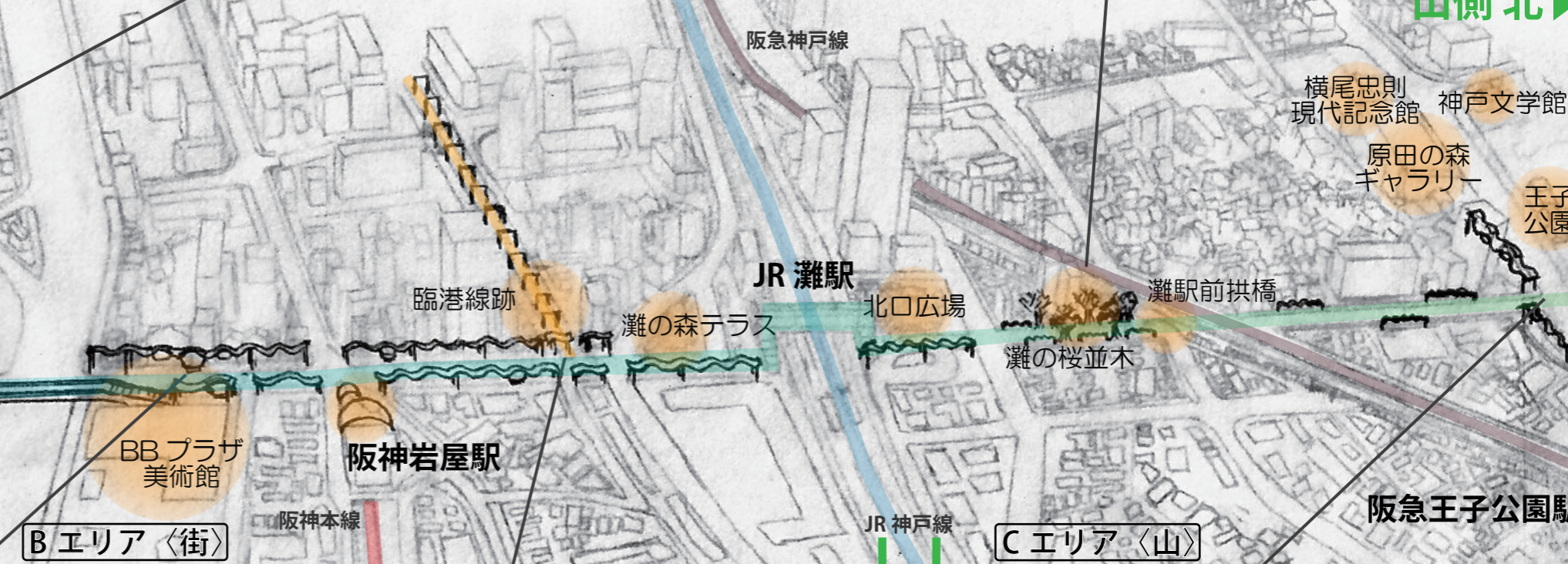


JR 灘駅北口から王子公園にかけての道は、駅南側よりも狭くなっている。また JR 灘駅北口から阪急神戸線の高架橋までは桜並木が続いている。桜を残しつつ狭い歩道に屋根を設けることは難しいため、海側の屋根の**ウェーブ形状を継承したベンチ**を花見を楽しむ場所とした。屋根とベンチで形状を統一することで、ミュージアムロードに**一体感**をもたらす。また阪急神戸線の高架下にあるシャッター街を**アーティスト・イン・レジデンス**に再生し、**アート制作を通じて人々が交流**しながらの場所とする。

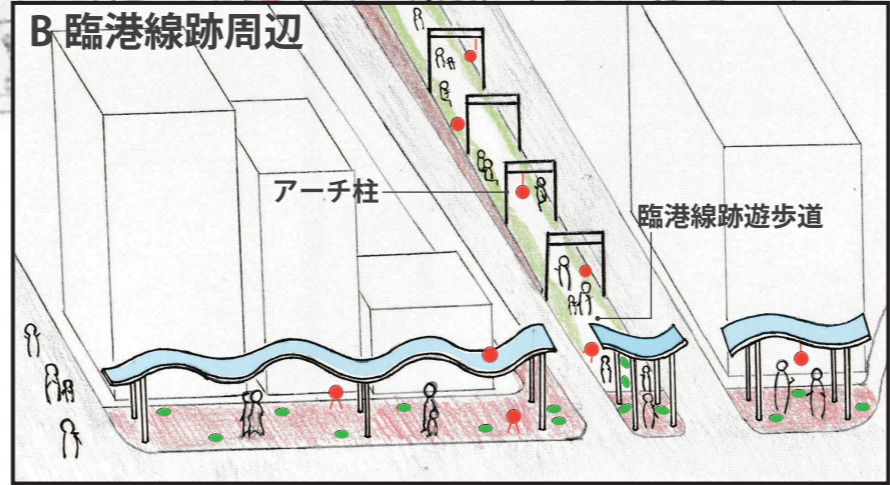
## 海側南



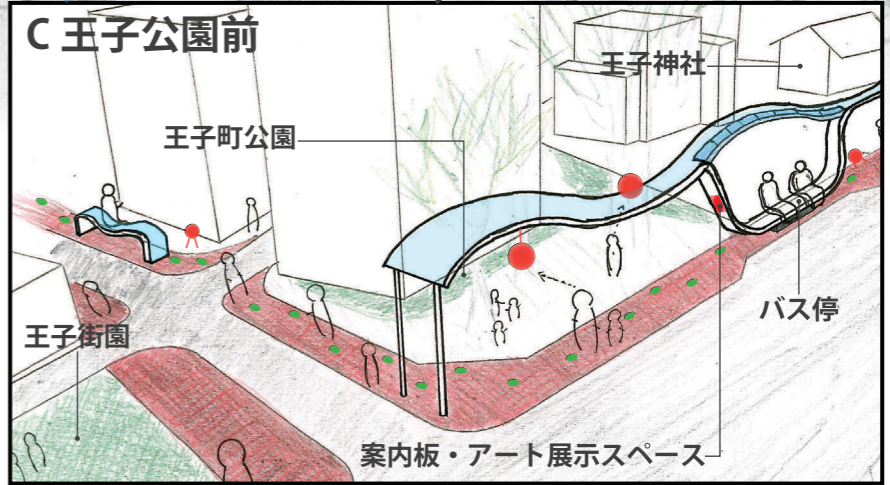
## 山側北



屋根の**ウェーブ**が垂れ下がるような形で、**ベンチやアート作品の展示スペース**を構成し、ミュージアムロードの各所に配置する。そのうち BB プラザ前のベンチは、市バスの**バス停のベンチ**としても利用される。アート作品を**屋根下の空間に展示**することで、**歩道を圧迫せず**に作品を展示できる。長い屋根を設置すると、柱の数が減るデメリットがあるが、一部を柱ではなく**ベンチで支える**ことで実質的に柱の数を減らし、**景観の向上**につながる。



JR 灘駅南側には神戸臨港線の廃線跡を整備した**遊歩道**があり、一部の線路や架線柱が残されている。遊歩道には**芝生**を整備することで、人々にとって**憩いの場**となる。また架線柱をモチーフにした**アーチ柱**を設置する。これにより、ミュージアムロードの**連続屋根と臨港線の遊歩道とを接続**し、**つながり感**が生まれる。



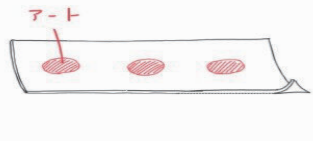
ミュージアムロードの山側の起点は、市道長田楠日尾線と接続する。ここはミュージアムロード外ではあるが、市道沿いにある**市バスのバス停**を含める形で、**ウェーブ屋根とウェーブベンチ**を設置し、ミュージアムロードの**スタート地点**であることを印象付ける。さらに市道の西側にある美術館に向けて**足跡**を伸ばすことで、**地域資源の利用**を促す。

## 計画趣旨

屋根の形状は部分的に変化を持たせ、アート作品を展示する空間や、ベンチとして利用できる滞留空間を設けた。これにより、アートを介して人々が交流し、つながることのできる空間として構築した。ミュージアムロードを単なる通過動線ではなく、立ち止まり、体験し、記憶に残る場として機能させることを目指している。

### 屋根形状の検討プロセス

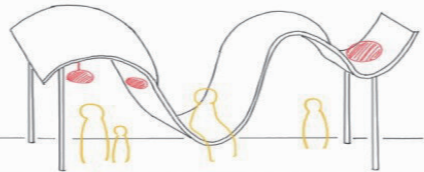
キャンバス



ウェーブ



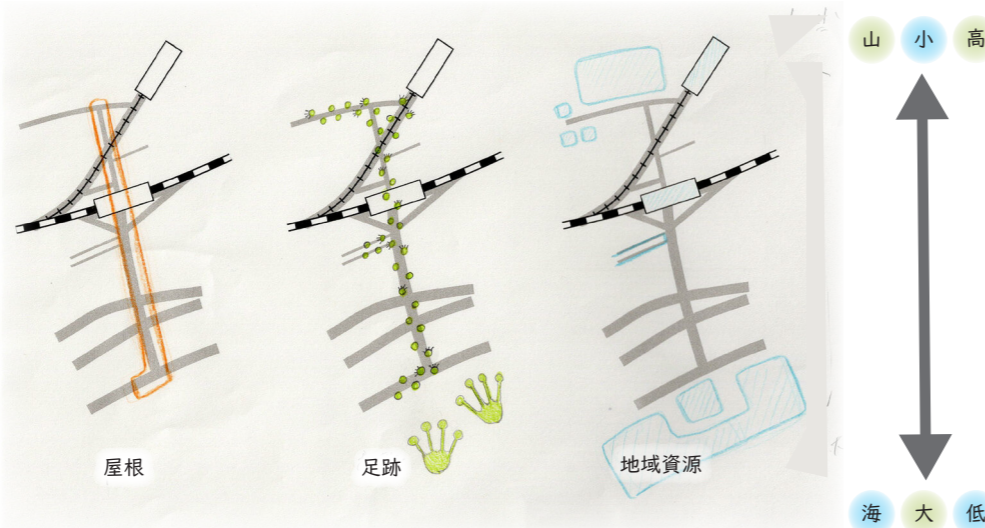
ルーフ



アートが描かれたキャンバスを、海の波や六甲の山々など神戸らしさをイメージして、ウェーブ形状に立体化することで、置く、吊るす、壁掛けなど多様なアート作品の展示空間が生まれる。さらにルーフ化することで人を呼び込み、人々がよりアートに触れやすくなる空間を計画する。

### 空間要素の整理

エリアごとによる道路幅の大小関係の変化を屋根のスケールに反映させることを意図した。具体的には、山手方向へ進むにつれて道路幅が徐々に小さくなるという特徴を踏まえ、屋根の大きさもそれに応じて段階的に縮小させている。これにより、空間に連続性を与え、周辺環境との調和を図った。



ミュージアムロードの足元には、兵庫県立美術館の屋上に設置されている「美カエル」をモチーフとした足跡を配置した。この足跡は、兵庫県立美術館を起点とし、美カエルが来訪者を周辺の動物園へと案内していくようなストーリー性を持たせている。単なる舗装デザインにとどまらず、歩行体験そのものを楽しめる仕掛けとすることで、来訪者の回遊性を高めることを意図している。さらに、ミュージアムロード周辺へと足跡を広げることで、周辺に点在する地域資源との接続を図った。これにより、訪れた人が周囲の施設へと赴ききっかけを生み出し、エリア全体の一体感を高める効果が期待できる。また、地域資源の近傍には、それらに関連したアート作品を展示する計画とした。これにより、地域資源の認知向上や関心喚起を促すことができると考える。

### アーティスト・イン・レジデンス

灘駅前拱橋の高架下にあるシャッター街を活用する。芸術家が日常の生活圏を離れ、一定期間この場所に滞在し、制作活動を行う場として位置づける。ここで制作されたアート作品は、ミュージアムロードに設けられた作品展示スペースに展示され、地域と芸術をつなぐ役割を果たす。

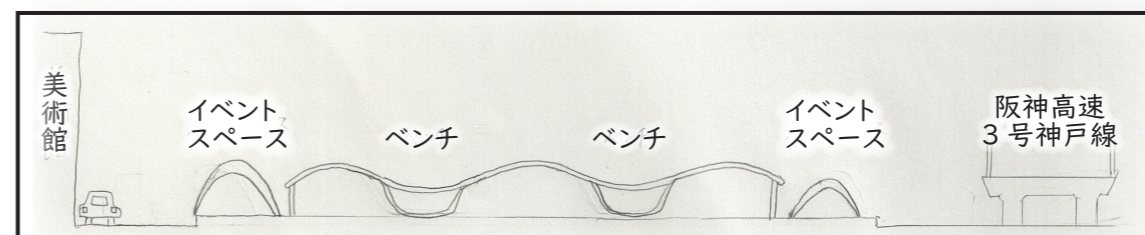
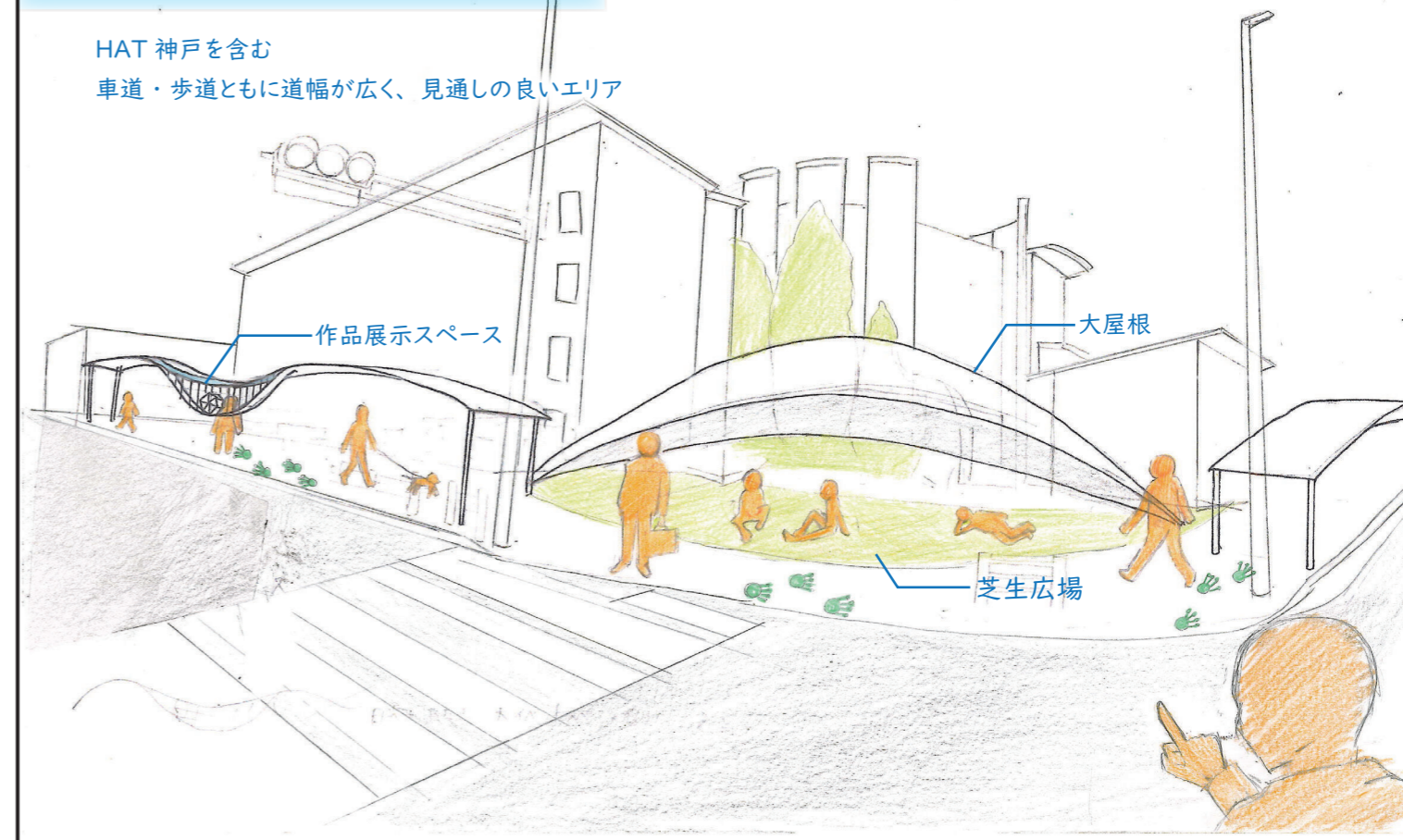
### 映像による空間の演出

阪急神戸線の灘駅前拱橋のアーチを活用し、プロジェクションマッピングによる壁面アートを投影する。さらに、プロジェクターを用いて、地面に動く足跡を投影する。一般的に地面の足跡は路上に貼り付けているため動くことはないが、投影し動く足跡とすることで、一味違った空間を演出する。デジタルにすることにより、足跡の投影以外の用途で利用できるメリットがある。例えば災害時に、近くの避難場所へ誘導ができ、土地勘がない人でも安全な避難が可能だ。また、プロジェクターは既存の電柱や街灯等に設置できるため、比較的導入しやすいことも利点である。

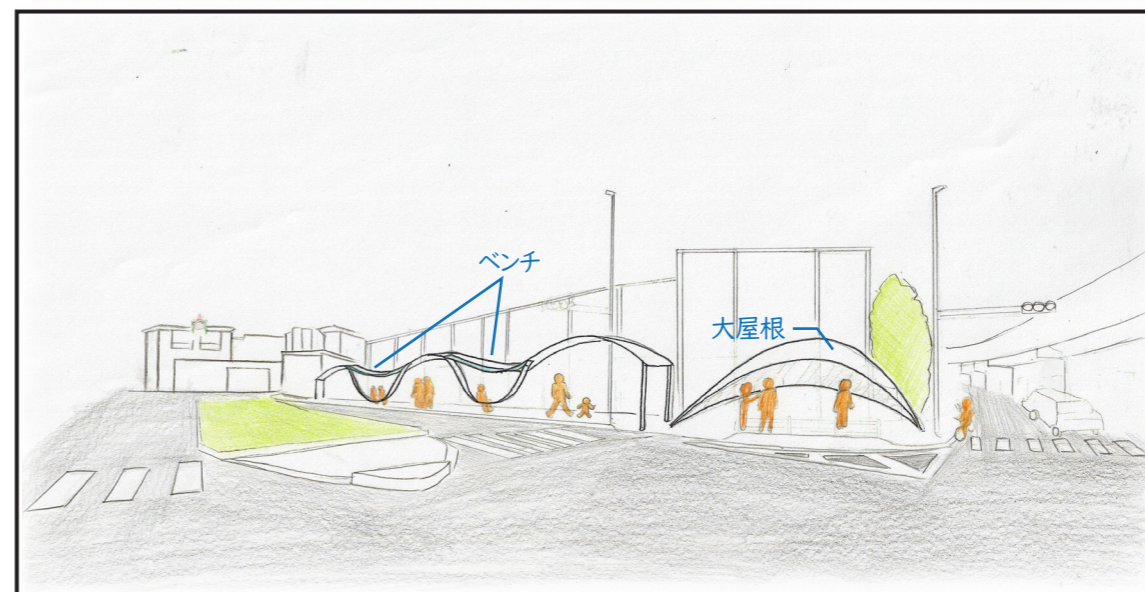
## A エリア - 海 -

HAT 神戸を含む

車道・歩道ともに道幅が広く、見通しの良いエリア



渚中学校前と県立間美術館の間、渚中学校前と阪神高速神戸線の位置する空き空間に2つに大屋根を設け、人々が集い、滞在できる公共空間を計画した。特に、県立美術館前の比較的広い空間では、主にHAT 神戸内の各施設による出張イベントを開催する場とし、通行者に対して施設の認知向上や関心喚起を促すことを目的としている。一方、イベントが行われていない時には寝転がることのできるなど、誰もが気軽に利用できるスペースとして解放し、人々の憩いの場となるよう計画した。

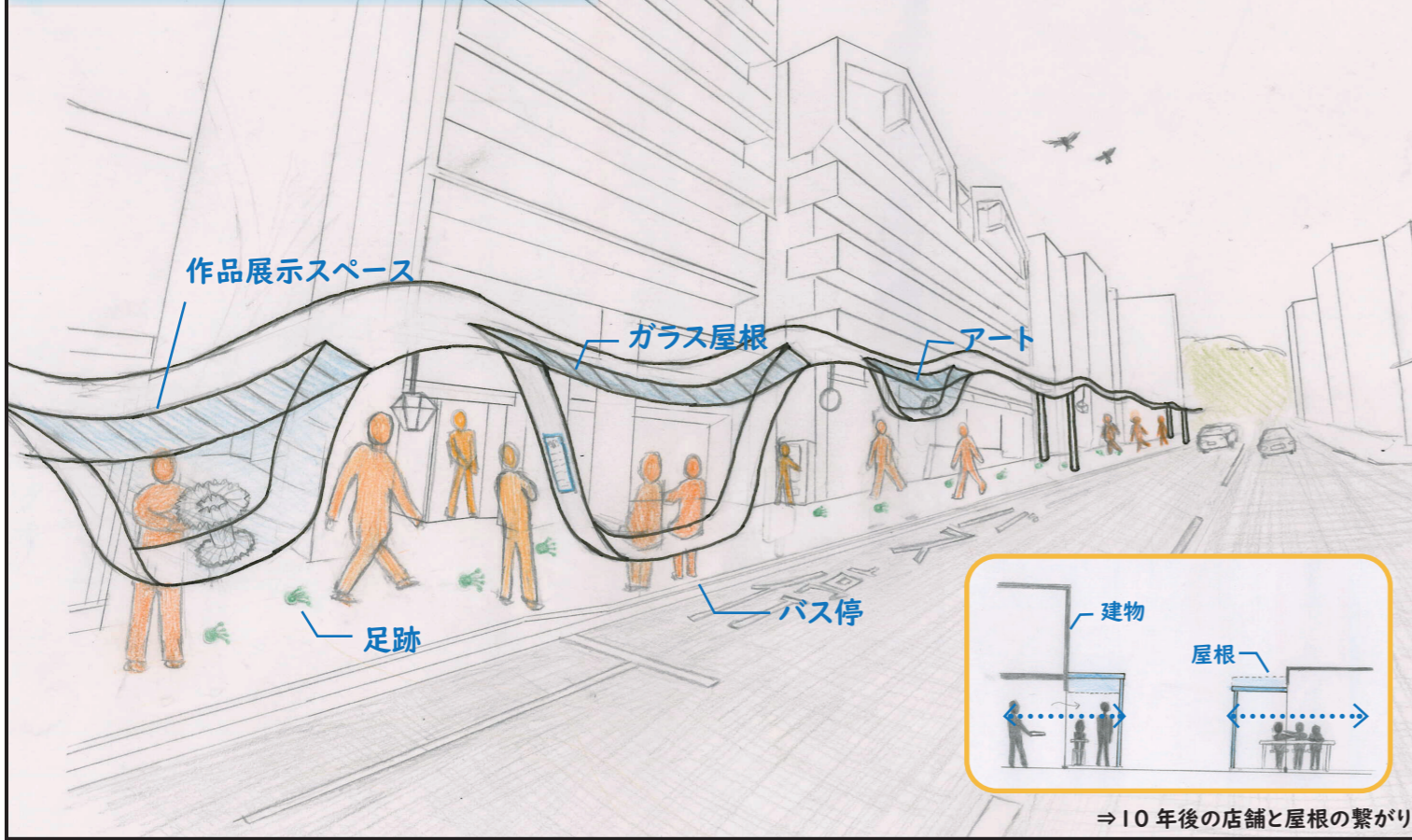


県立美術館前をミュージアムロードの起点として、大屋根広場を設けることで象徴的な存在となることを意図している。さらに、ミュージアムロードからは外れるが、市道灘浜脇線西側へ屋根を延長することで、HAT 神戸西側に在る博物館やスケートリンク、公園などの地域資源とのつながりを意識した空間構成としている。屋根の形状は部分的に変化を持たせ、アート作品を展示する空間や、ベンチとして利用できる滞留空間を設けた。

ミュージアムロードの東側歩道には、すでに歩道橋が設けられていることから、ウェーブ形状の屋根は設置が難しいと判断した。ただし、歩道橋下の空間にアート作品の展示やベンチの設置等をし、ミュージアムロード西側歩道との調和をとる。

# B エリア - 街 -

- ・商業施設が多い
- ・人通りが多い



⇒ 10年後の店舗と屋根の繋がり

B エリアでは、歩道全体を覆うように屋根を設けている。屋根は全体としてウェーブ形状としつつ、部分的に波の大きさを変化させることで、ベンチとして利用できる空間や、アート作品の展示スペースなど、多様な使われ方が可能な空間を創出している。BB プラザ前に設けたベンチは、休憩スペースとして、またバス停の待合空間としても利用されることを想定している。アート作品は屋根下の空間に配置することで、歩行者の動線を妨げることなく展示が可能となっている。また、横断歩道や車道部分には屋根を設けず、途切れた部分同士の流れを意識的につなげることで、波の連続性を保ちつつ、車両通行の妨げとならないよう配慮している。

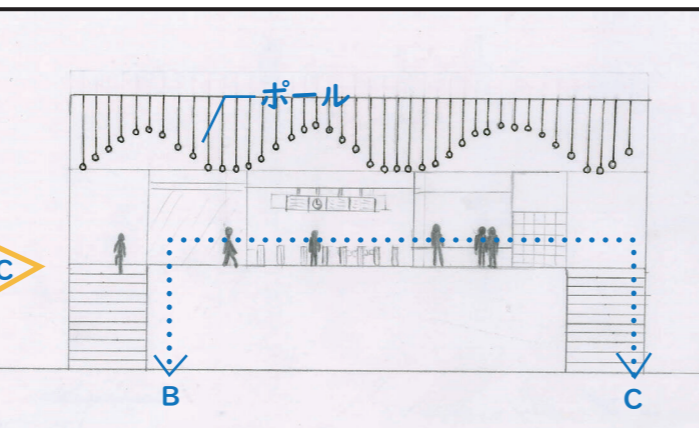
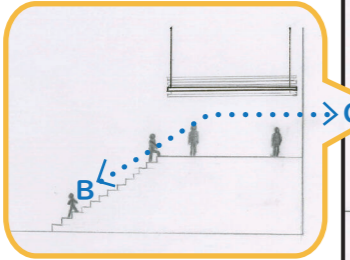


## 神戸臨港線廃線跡の遊歩道

神戸臨港線の跡地を整備した遊歩道では、一部に残されている線路や架線柱といった既存の地域資源を活かし、架線柱をモチーフとしたアーチ柱を新たに設置する計画とした。遊歩道の中央には自転車・歩行者の通行空間を確保し、その両端に芝生やベンチを配置することで、人の流れを妨げることなく、交流や休憩、立ち止まることのできる滞留空間を形成している。

## 灘駅BエリアとCエリアの接続

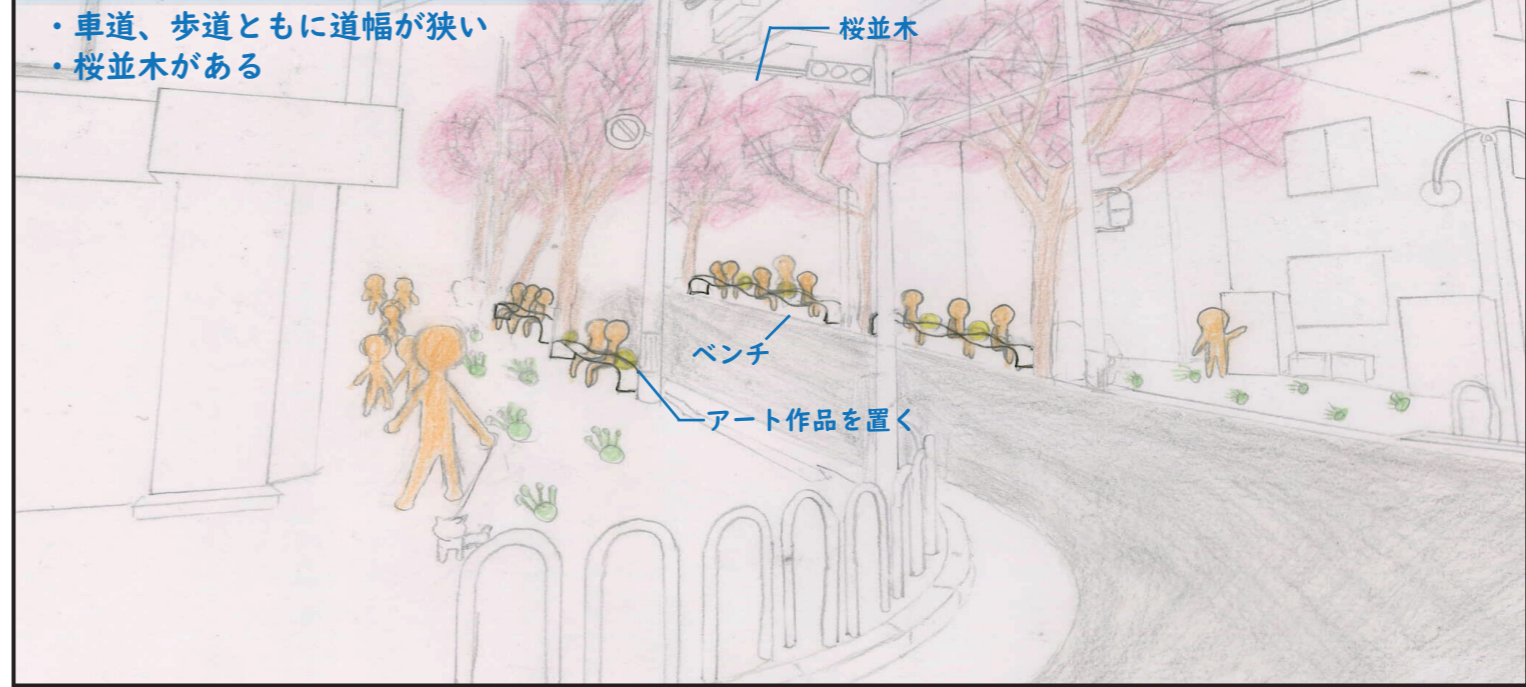
B エリアとC エリアの境界に位置する灘駅では、駅構内においても波の流れが連続するように、天井から長さの異なるポールを吊るす計画とした。一面を覆う屋根を設けるのではなく、間隔をあけてポールを配置することで、駅空間に圧迫感を与えずに、B エリアからC エリアへと続くデザインコンセプトの接続を図っている。



JR 灘駅断面図

# C エリア - 山 -

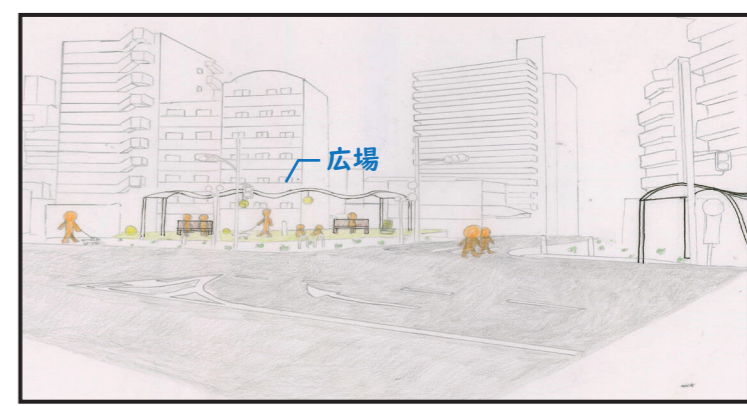
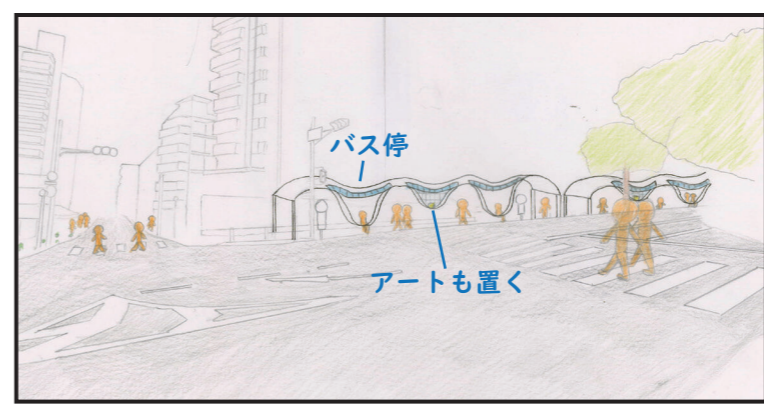
- ・車道、歩道ともに道幅が狭い
- ・桜並木がある



C エリアは車道および歩道の幅員がともに狭く、A・Bエリアで提案しているウェーブ形状の屋根を設けることが困難であると判断した。そこで本エリアでは、屋根の設置に代えてウェーブ形状のベンチを配置する。周辺には桜の木が植えられており、季節ごとに変化する景色を楽しめる環境が整っている。また、これらのベンチには所々にアート作品を展示する。利用者はベンチに腰掛け、風景やアート作品を見ながら、そして近隣店舗で購入した飲食物を嗜みながら、1人でも、また誰かと一緒に、ゆったりと憩うことができる場となることを想定している。



ミュージアムロード周辺は、美術館やパブリックアートなどが点在し、元来より芸術や文化に関心が高い地域である。また 2029 年には大学の新キャンパス開学が予定されていて留学生も多く訪れる。これらのことから芸術家と地域住民そして国内外の学生等が、アート作品の制作を通じた交流をすることで、ここにしかない芸術・文化が生まれると考えた。その制作スペースとして、これを阪急神戸線の高架下にあるシャッター街をアーティスト・イン・レジデンスに再生する。アーティスト・イン・レジデンスとは芸術家が普段の生活圏を離れ、一定期間、別の土地や施設に滞在して制作活動やリサーチを行う制度、またはその支援を行うプログラムのことである。ここで制作されたアート作品は、ミュージアムロード各所に設けられた作品展示スペースに展示され、地域と芸術をつなぐ役割を果たす。行政や大学、住民が参加する創作活動を通じて、ミュージアムロード全体の文化的価値を高める。



ミュージアムロードの起点である王子公園前に存在する小さな広場は、A・Bエリアと同様にウェーブ形状の屋根を設け、ベンチやアート作品を配置する。地面では利用者が座ったり寝転んだりしながら、楽しく、また穏やかな時間を過ごせる空間とする。加えて、広場の反対側に位置するバス停にはBエリアと同様にウェーブ形状の屋根の一部を地面まで下げ、ベンチとして活用する。待ち時間に座って過ごすことができるだけでなく、アート作品を設置することで、移動の場においてもミュージアムロードの世界観を感じられる空間を創出する。